

登録番号	第089号
名称(型式等)	KDDI 株式会社 千倉海底線中継所
所在地	南房総市千倉町内
設立(竣工)年	平成元(1989)年(開局)

選定理由

昭和 39(1964)年、KDDI の前身である国際電信電話(KDD)他により第 1 太平洋横断海底ケーブル(TPC-1)が敷設されました。この TPC-1 に用いられた同軸海底ケーブルによる有線通信と、同じころに始まった衛星通信が、それまでの電信海底ケーブルや無線に代わる国際通信の、新たな手段になっていきました。

平成元(1989)年、太平洋で初の光海底ケーブルによる第 3 太平洋横断海底ケーブル(TPC-3)が KDD 他により敷設されました。TPC-3 には KDD が実用化した国産初の国際通信用長距離光海底ケーブルシステムである OS-280M 方式が用いられました。それまでの同軸海底ケーブルは 2 点間(1 対 1)での接続でしたが、光海底ケーブルでは海中分岐装置により 3 点以上との接続が可能となり、日本とグアム・ハワイが接続されました。また、TPC-1 は電話に換算して 142 回線でしたが、TPC-3 では 7560 回線と大幅に向上しています。当時の国際通信は衛星と海底ケーブルが半々でしたが、1990 年代後半からのインターネットの普及で爆発的に増加する需要に応えるため、衛星や同軸海底ケーブルから光海底ケーブルに軸足が移り、現在では99%が光海底ケーブルで行われています。国際通信の転換点となった光海底ケーブルを用いた TPC-3 が、国内に陸揚げされたのが千倉海底線中継所です。

海底ケーブルの陸揚げ地はどこでもよいわけではなく、様々な条件を満たし、将来を見据えた用地選定が必要です。日本の国際通信の歴史を担い、日本とアジア、日本と北米、そしてアジアと北米をつなぐ千倉海底線中継所の重要性は今後も揺らぐことはないでしょう。

千葉県には世界への玄関が 3 つあります。
 空の玄関が成田空港、海の玄関が千葉港、
 そして情報の玄関が千倉海底線中継所です。



千倉海底線中継所 遠景



光海底ケーブルの千倉への陸揚げ



陸揚げされた端部



端部を開き露出させた光ケーブル

協力：KDDI 株式会社